

海の魅力度向上
—海洋国 NIPPON における 1 年を通じた海の活性化—

神奈川大学 大竹ゼミナール チーム J

○滝原 幸紀 岡本 大希 軈 舞香 山本 祥也 関 しおり 佐藤 真奈実

1. 緒言

地球上の約 7 割の面積を占める広大な海は、生き物にとって非常に大きな存在であり、多くの生物の起源でもある。人類の進化の過程の中でも海が存在価値は大きく、今では食料の確保の他に、学び、リラクゼーション、スポーツといった多種多様な目的に利用され、私たち人類は常に海とともに歩んできた。しかし、海を利用する人々は年々減少し、好感度や親しみが薄れる「海離れ」が進んでいる(日本財団, 2017)。その理由の一つとして、砂浜に落ちているゴミ等による環境の悪化があげられる。また、夏の海水浴のイメージが定着し、他の季節の利用客がいないなど、海への興味関心が薄れていることも現状である。だが、日本は領土が全て海で囲まれている世界で数少ない島国のひとつであり、国土面積は世界第 61 位に対し、海岸線の長さ、経済水域の広さは世界第 6 位である。つまり日本は海と触れ合い、活用するには非常に恵まれた環境であり、その資源をさらに有効活用し、「海洋国 NIPPON」として国全体で海との関わり方について再確認する必要がある。

2. 目的

海を有効活用していくには今よりも多くの人を集客することが前提となる。しかし、緒言で述べたように、夏の海への偏りがあげられる中で、夏以外の季節にも集客を行い、1 年を通して人を呼ぶことが必須となる。また、多くの人を集客した結果、現在問題視されているゴミの増加や環境が悪化する可能性もある。これらを踏まえ、安全で綺麗な海を守りつつ、スポーツやアクティビティ等で 1 年を通して人が集まることを目指し、海の四季ごとの具体的活用方法と、それらを実現するための協働システムを、国土交通省・スポーツ庁・自治体など、海岸に関わる組織^{註1}へ向けて政策提言する。

3. 研究の方法

本研究ではまず、1 年を通じた海の活用方法の模索という観点から、人々の海に対するイメージと利用実態、環境保全対策としてゴミ問題の現状について明らかにする。これら
の問題解決方法として、スポーツに着目し、海でのスポーツの効果について調査を行った。具体的な調査内容は以下の通りである。

- (1) 文献調査：海のイメージを調査し、活用方法について考察した。
ア. 沿岸域開発のための海のイメージ調査
- (2) 現地調査：海岸の現状を調査し、スポーツができる環境であるか考察した。

- ア. 鎌倉市と鎌倉の海を守る会主催「ビーチクリーンアップキャンペーン」
- (3) 文献調査：海岸の維持管理費について調査した。
 - ア. かながわ海岸美化財団の調査（公益財団法人かながわ海岸美化財団 HP）
- (4) 文献調査：海でスポーツを行うこと・海へ行くことで得られる効果を調査した。
 - ア. 裸足での砂浜トレーニングが足部に与える影響・気候療法

4. 結果・考察

(1) 海のイメージと利用頻度

海のイメージ調査（竹沢ら，1994）の「海の季節感」についての結果では、「夏」が72.1%と非常に多く、「冬」が12.3%である。しかし、海近辺の居住者は、1年の中で海に触れる機会が多く、「春」「秋」の割合が他と比べて高く、「夏」との差は小さい。一方、都市部や山間部の住民は主に海水浴やドライブ等に限定され、夏場に季節感が集中している。人々の海に対するイメージは、海とあまり接点がない人ほど夏に偏りがあることが示唆される。

(2) 海岸の現状

実際に海の清掃活動に参加したことで、現地の方の悩みを聞くことができた。1つ目はごみの問題である。鎌倉や藤沢の海岸には多くの漂流物や海岸ごみがあり、自転車やBBQセットなど観光客が海岸を利用し、持ち帰らずにごみとなってしまったものが多かった。

2つ目は「強制力」の問題である。かながわ海岸美化財団などが海岸保全活動を行っているが、ボランティア中心のため徹底した活動が出来ず、注意喚起で終わってしまう。このことから、海を利用する人々に向けた環境保全やマナー向上の啓発が必要となる。

(3) 海岸の維持管理費

かながわ海岸美化財団の調査（公益財団法人かながわ海岸美化財団 HP）によると、神奈川県は2006年度において総額で2億1,900万円の費用を要しており、海岸清掃による維持管理費に巨額な費用がかかっている。これらを市町村が負担、つまり税金で賄われ、国及び地方の財政を圧迫している。そのため、清掃業者への依頼を減らし、ボランティアによって海岸の環境整備をする必要がある。

(4) 海で得られる効果

海は、足の動きが重要なスポーツ（サッカー・ラグビーなど）やリラクゼーションを目的とした運動に最適であることが以下の文献調査から分かった。

- ア. 吉田ら(2007)によると足部機能の改善に適していることが示唆されており、パフォーマンス向上や足部機能の低下などの起因する障害の予防にも有効である。
- イ. 松本(2014)によると足部内在屈筋および足関節周囲筋の筋力増強に効果があり、リハビリテーションのひとつの手段となることが予想される。
- ウ. 大塚(2012)によると海岸での大気欲は新陳代謝を高める働きがあり、酸素消費量を増加させ、自律神経を安定化させる。また、海風は海塩粒子のカルシウム、マグネシウム、ヨードなどの身体機能に重要なミネラル成分が、気道の炎症を和らげる。

以上の調査結果から以下の課題を考察した。

- (1) 夏に利用者が偏り、他の季節の利用者が少ない。
- (2) 海岸のごみが多く、気軽にスポーツやアクティビティをできる状態ではない。
- (3) 海を利用する人々に環境保全やマナー向上を働きかける方法が必要。
- (4) ボランティアの有効活用ができず税金負担が多い。
- (5) 海で楽しめる新しいレジャーやスポーツの開発が必要。
- (6) 教育の場として海を活用し、海についての理解をさらに深める必要がある。

5. 提言 NPO 法人 OCEANS の設立と協働システムの構築

海岸に関わる関連組織や自治体は多数存在するが、それらの統括組織は存在しない。単体事業では活動資金や人員確保の面から事業運営は困難であり、関連組織の機能を一元化し統括する必要がある。数多くの関連組織を統括管理し、海の1年を通じた活性化の課題解決方法を日本全国へと普及していくための NPO 法人 OCEANS(表 1)の設立とそれを中心とした官民連携による協働システム(図 1)を提言する。

表 1 NPO 法人 OCEANS の役割

NPO 法人 OCEANS	
設立理念	1.安全で綺麗な海的环境保全と1年を通じた海の活性化 2.海岸に関わる関連組織の統括管理
役割 1	四季を通じた海の活用事業の企画運営
役割 2	海的环境の保全活動やマナーUP
役割 3	海的环境拠点と情報発信・コミュニティ形成
役割 4	海におけるスポーツの振興と普及活動
役割 5	海の教育の場として各学校へ向けた環境教育事業
役割 6	関連組織のマネジメントと連携調整

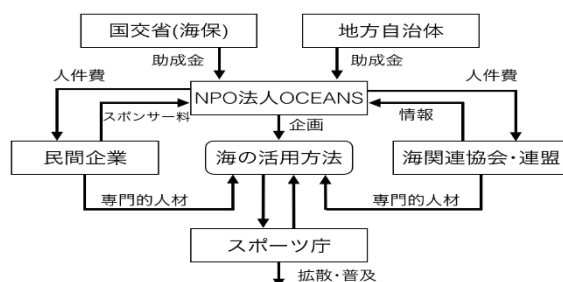


図 1 協働システム

(1) 役割 1 四季を通じた海の活用事業の企画運営 (表 2)

表 2 各季節の海の活用事業

春	夏	秋	冬
フレッシュスポーツ	サマースポーツ	パイレーツスポーツ	トラディショナルスポーツ
<ul style="list-style-type: none"> ・ビーチヨガ ・海岸療法実施 ・スポーツ交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・海スポーツの促進 ・スポーツゴミ拾い ・花火大会とコラボ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハロウィンイベント ・スポーツ×海賊 ・サンドアート 	<ul style="list-style-type: none"> ・羽子板、凧揚げ ・伝統遊びをスポーツ化 ・駅伝 or マラソン
通年			
各季節に応じたビーチスポーツの情報発信と環境の整備 / 地元の教育機関と連携し海の教育活動の推進 ヘルスツーリズムの窓口として周辺宿泊施設と連携 / ごみ拾いの通年の拠点として啓発活動とサポート			

(2) 役割 2 海的环境の保全活動やマナーUP 啓発

かながわ海岸美化財団の「ゴミ箱設置プロジェクト」と協働し、ゴミ箱の設置場所と分別方法を記載した「ゴミ箱 MAP」を作る。海近辺の施設や駅・駐車場で看板設置や、プリントを配布し、ゴミの持ち帰りや、海岸の美化、スポーツの環境整備につなげる。

(3) 役割 3 海での活動拠点としての情報発信とコミュニティ形成

集会所やロッカー、シャワーなどアメニティ機能を整備することで、海での活動を促し、様々な目的、年齢層の人々同士をつなぐコミュニティ形成の場として活用する。また、海活動の窓口として情報を分かりやすく整理し、多種多様なニーズに応じた情報提供を行う。

(4) 役割 4 海におけるスポーツの振興と普及活動

海でのスポーツ振興・普及活動を促進するために、スポーツ庁に OCEANS での季節ごとのイベントや事業内容に関する情報の提供を行う。スポーツ庁の Twitter や Facebook で拡散、宣伝を依頼し、OCEANS という組織の知名度を向上させる。

(5) 役割 5 海の教育の場として各学校へ向けた環境教育事業

海上保安庁や教育委員会と連携し、学生に向けて「学び」・「保全」・「安全」についての勉強会を開く。「学び」では海の生態系や水質について、「保全」は海の利用マナーやゴミの取り扱いについて理解し、環境保全に対する意識を高める。「安全」では自然災害や水難事故の対策を保護者向けにも実施し、水難事故の防止や親子間の安全を喚起する。

(6) 役割 6 関連組織のマネジメントと連携調整

OCEANS は協働システム(図 1)の中心となって関連組織の統括とマネジメントを行い、定期的にシンポジウムや運営会議を開催し、情報共有や事業展開の話し合いを行う。また、国交省、自治体など行政との事業連携による助成金の支援のみではなく、民間企業や関連協会と win-win になるスポンサー契約(表 3)を結び、財源確保の課題を解決する。

表 3 民間とのスポンサー契約

スポンサー例	スポンサー側のメリット	OCEANS 側の事業
スポーツ用品メーカー	商品宣伝、新商品開発、スポーツの促進	スポーツ用品の紹介、体験
出版社	作品宣伝、著作権料、海の最新情報獲得	漫画、雑誌とコラボ
フィットネス	プログラム宣伝、新規会員獲得、事業展開	ビーチフィットネスの促進
旅行会社	ツアー宣伝、新規顧客、ヘルスツーリズム展開	ヘルスツーリズム連携
食品・飲料	商品宣伝、サンプリング配布、イメージ UP	商品販売、サンプル紹介
各交通機関・駐車場整備	広告宣伝、利用客増加、アクセス面の整備拡大	アクセス情報拡散、各地域対応
医療(接骨・整体・心療)	海岸療法リラックス効果、砂浜トレーニング効果	海岸の安心安全な環境提供

6. まとめ

本研究では海を活用する各季節のプログラムと、関連組織を統括管理する協働システムを提言した。しかし、海への集客に観点を置きすぎたため、プログラム実施による騒音・治安悪化問題が予想される。今後の課題として、地域住民を配慮した内容をプログラムに取り入れることを検討していきたい。

注 1)本研究では海岸を管理する行政、利用する企業、海岸で活動する協会・連盟を指す
 <主要参考文献>

井上雅夫、橋中秀典、近藤雅彦、橋詰雅子(2002) 秋冬期における砂浜海岸の利用実態調査
 大塚吉則(2012) 気候療法

竹沢三雄、前野賀彦、高橋勇樹、島木栄佳(1994) 沿岸域開発のための海のイメージ調査